

編集後記

締め切りを過ぎているのに、なかなか原稿を送って頂けない。編集者の慢性的な悩みである。胃の辺りが痛くなる思いすらする。そこで何故、書いて頂けないのか考えてみた。

原因はevidenceの一語に尽きると思う。話し言葉は、多少、意味が曖昧でも通じてしまう。話し手が間違った言葉を用いても、聞き手が正しく解してくれることもある。空中に放たれた言葉は、いつかは忘れられてしまう。これに比し活字の場合、evidenceを十分に揃えて書かないと、とんでもない恥を残すことになる。このへんの責任の比較にならない重さが、多くの人に書くことを億劫がらせる一因とも思われる。

かつて筆者は、野間の杉本美術館を訪れたことがある。通常、美術館は、しんと静まり返った静寂に満ちているはずである。ところがこの時は、入館した時から、どこかでかん高い人の声が聞こえていた。行儀の悪い人が居るものだと不審に思いながら歩みを進めると、やがて声の主が分かった。なんと杉本健吉画伯自身が、一群の高校生を前に、展示品を一生懸命、解説している声だったのである。驚いて近くの館員に問うと「先生は若い人がお好きで、生徒さん達の団体が来られると喜んで解説役を買って出るので」と、敬愛に満ちた眼差しで教えてくれた。当時の画伯は95歳だったが、若い世代に自分の作品を、絵画の楽しみ方を理解してもらおうとふるう熱弁は、年齢を感じさせず感動的でした。

ひるがえって研究者の場合、残し置きたい研究成果、これだけは人々に伝えたいと思う自説が必ずやあるはずである。いやそれを後生に残すことこそ、研究者の努めではないのか。筆を重くする理由はどこにも存在しないと思う。

他方、当方にも負い目がある。本誌が投稿に値する学術誌か否かである。誰もが喜んで寄稿してくれる最低の条件、それは年間、複数回の刊行を実現し学術誌としての評価を確立することである。そのためには5年、いや10年掛かるかも知れない。文化は一朝には成らないのだ。その覚悟で本誌を育て次世代に遺してゆきたい。〔高橋 英世〕

編集委員 (50音順 *印委員長)

額田 協*	池山 淳	杉藤 徹志
高橋 英世	松本 美富士	

明日の臨床

Vol. 15 No. 2

2003年12月25日発行

編集 明日の臨床編集委員会

発行所 愛知県保険医協会

〒466-8655 名古屋市昭和区妙見町19-2

☎ (052) 832-1345

制作 (株)東海共同印刷

頒価 1,000円・発行部数 6,900部